

東京、2002年1月23日

美しい人、

そぞろ歩いた。

君のことを考えながら。

哀愁が茶色の短く刈られた芝生に広がる。

茶色の、金色の、たばこ色のざらざらした芝生は動物の皮のよう、母なる大地の乾いた頭皮。ぼんやりと眺めると真っ青な空。あちらには色には目もくれぬ雲がもくもくと立ち上がる。まるで海の化け物を威嚇するため入れ墨をしていたという和の国の潜水夫のように。

風に震え、雨を溜め、積雲が立ち上がる。

マルコ・ポーロは著書(東方見聞録)の中で日本を「ジパング」と呼んでいたのを知っているかい?この本をクリストフ・コロンブスもカラベル船に乗せて持参したそう。金と宝物のあふれる国ジパングにマルコ・ポーロ自身は脚を踏み入れたことがなかったらしい。

しかしこの名はまるで、ランボウの筆で描かれるザンジバルのような響きを持つ。その語り口が似ているからだろう。アルチュールは書いている:僕はザンジバルにも他のどこにも行くことはないだろう(1887年11月5日の手紙)

少し前に僕は箱根に行った。

富士山のふもとの湖畔だ。

4年前、この湖と山と、緋色の弧線の写真を見たのを思い出した。これを見て僕は日本、ジパングに来ようと思ったんだ。突然浮かんだ考えはずっと僕につきまとった。そのことを少し忘れていた。

富士山のふもとを歩くことになって、僕はその写真のことを思い出した。僕はその写真の中を歩いた。思いがけず、達成感を感じる。美術館の入場券に載ったその写真を君に見せよう。

相対(あいたい)

エリックより